

クマタカの巣で採集した餌動物の残骸

久保上 宗次郎*

はじめに

鳥類の食性調査方法のひとつに、食べ残しの分析による方法が知られている(黒田, 1982)。国内でのワシタカ類に関する報告では、イヌワシの食性調査(立花, 1984; 池田ほか, 1986)などにみうけられる。

クマタカにおいても、その食餌動物について宮崎(1975)は、ノウサギが多いとしており、ヤマドリやキジなどを上げている。これら中型動物体のすべてを食べ尽くすことは困難であるものと考えられ、比較的大きな骨は残されることになる。

筆者は、1976年より福井県若狭地方を中心とするクマタカの生態調査を行っており、営巣状況の一部については既に発表した(久保上, 1986)。今回、クマタカの巣において残留物(残骸)を採集し、分析する機会を得たので、ここに報告する。

なお、採集した残骸の同定をしていただいた工藤善民氏(滋賀県湖南家畜保健衛生所), 山崎亨氏(日本イヌワシ研究会)及び骨格についてご教示いただいた田辺勉氏(信州大学農学部畜産学科), 原稿に目を通して下さった池田善英氏(金沢大学自然科学研究科生命科学専攻)に対し、心より厚くお礼申し上げる。

調査及び方法

若狭地方の山地帯は、野坂山地の西方に位置する。北東から南西方向に続く山嶺は、断層によってブロック化されているもののほぼ定高性がみられ、海拔600~700mで所々峰を有している。三国山(876m)・雲谷山(786m)・三十三間山(842m)・百里ヶ岳(931m)などがある。

調査対象は、1983年から1984年にかけて繁殖した6巣とし、クマタカが繁殖活動を終えた後、巣の表面及び巣の直下の地上において残骸を採集した。営巣樹の途中に引っ掛かっていた一部の残骸は、地上採集の項目に含めた。いずれも、クマタカの食餌動物体の一部であるものと思われる。採集にあたっては、糞、ペリット及び同定不能と思われる細かい骨片は除外した。残骸の同定は、科のレベルまでとした。

なお、推定個体数の算出は、骨格の分析により重複する部分を考慮して計上した。

結果及び考察

(1) 調査結果の詳細は、表1に示した。生息地及び巣のコード番号は、久保上(1986)を参照されたい。

*三方郡三方町南前川39-23(日本野鳥の会福井県支部会員)

表1 繁殖巣及びその直下の地上において採集した餌動物の残骸

採集年月日	コード(生息地・巣)	採集場所	種類及び推定個体数	残骸の分析結果
1983.10.13	40421-1	地上	キジ 1	左鳥啄骨・左肩甲骨・右上腕骨・右尺骨・右肩甲骨・毛
1983.10.13	40421-1	巣内	カラス 1 キジ 1 ウサギ 1	胸骨・右腸骨・坐骨・羽 胸骨・癒合鎖骨 仙骨・腰椎(第2)
1983.10.20	40413-2	地上	キジ 1 ウサギ 1	羽 骨片(不明)・毛
1983.10.22	40413-2	地上	キジ 1	胸骨・右上腕骨・右鳥啄骨・右肩甲骨
1983.11.15	40412-2	巣内	キジ 1 イタチ 1	胸骨 下頸骨(左右)
1983.11.16	40312-1	巣内	ウサギ 1 ウサギ 1 (幼獣) キジ 1	右恥骨・右座骨・右腸骨・左側中足骨(第4)・腰椎(第2~7)・仙椎 大腿骨(左右)・下腿骨(左右)・寛骨(右)・腰椎(第2・3)・右脛骨・足根骨(第4)・右側第4中足骨 胸骨
1984.8.20	40414-1	地上	カラス 1	右上腕骨・左尺骨・左橈側手根骨・第4中手骨・左尺手根骨・第3中手骨・第3指・第4指・羽
1984.8.20	40414-1	巣内	カラス 1 ヘビ 1	右上腕骨・右尺骨・右橈側手根骨・中手骨・羽 椎骨(15個)・肋骨(左3個)
1984.8.30	40422-1	地上	ウサギ 1 キジ 1 カラス 1 不明(鳥) 1	右下腿骨・膝蓋骨・右腓側足根骨・胸椎(第10~12)・腰椎(第1~4) 胸骨・羽 羽 胸骨・右鳥啄骨
1984.8.30	40422-1	巣内	キジ 7 カラス 1 ウサギ 1 不明(鳥) 1	胸骨(第1~5)・肩甲骨(右2個・左1個)・右鳥啄骨(2個)・胸椎(第1~5)・寛骨(2個)・右下腿骨(2個) 右鳥啄骨・右上腕骨・羽 左恥骨・左座骨 胸骨端(水鳥)

クマタカの巣で採集した餌動物の残骸

推定個体数のうち、綱のレベルでは、鳥類21個体(72.4%)で大半を占めており、哺乳類7個体(24.1%)、爬虫類1個体(3.4%)であった。

科のレベルでは、キジ科14個体(48.3%)で最も多く、次いで、ウサギ科6個体(20.7%)、カラス科5個体(17.2%)、イタチ科1個体(3.4%)、不明3個体(10.3%)であった。

(2) 本調査における残骸の同定率は、科のレベルでの推定個体数比89.7%と、高い数値を示した。

しかし、採集することのできた残骸は少量であり、1巣当たりの推定個体数は2.9個体と極めて少なものであった。今回の調査対象のうち、半数にあたる3巣については巣内雛期において直接観察を行ったが、その際、残骸の散乱状況は今回の調査時とほぼ同様であり、量的にも大差はみられなかった。

残骸の回収率が低かったことの理由として、次のことが考えられる。

まず、残骸は親鳥によって、頻繁に運び去られているために少量であったこと。

次に、数例ではあるが、カケス、ヒヨドリ、ヒミズ、アカネズミの捕食例(井上・山崎, 1984; 菊田, 1984)がある。また、当調査地の直接観察によれば比較的ヘビ類が多い(久保上, 未発表)。これらは、丸呑みにされたり、細かく裂いて食べ尽くされてしまうものと思われる。このように、食餌動物の多くを小型の鳥類や哺乳類及び爬虫類などが占めている場合には、残骸の回収例数は少ないものとなろう。

以上の2点であるが、その割合はどの程度のものなのか、今回の調査ではよく判らない。クマタカの食餌動物は多種多様に富んでおり(菊田, 1984), 地域差もあるものと思われる。また、季節変動及び調査の方法により差異を生じていることも少なからず考えられる。クマタカの食性全般についての考察は、別の機会に他の調査データを併せて、比較検討するつもりである。

引用文献

- 池田善英・上馬康生・加藤晃樹・山本正恵(1986)：石川県白山山系におけるイヌワシの食性，石川県白山自然保護センター研究報告 13: 17-29
- 井上陽一・山崎亨(1984)：同一地区に生息するイヌワシとクマタカの食性比較，*Aquilachrysaetos* 2: 14-15
- 菊田浩二(1984)：吉野の自然観察の記録No.1，奈良県川上村立川上中学校
- 久保上宗次郎(1986)：福井県若狭地方に生息するクマタカの営巣状況，福井市立郷土自然科学博物館研究報告 33: 57-64
- 黒田長久(1982)：鳥類生態学，出版科学総合研究所
- 宮崎 学(1975)：常食は生餌ばかり，野鳥の生活：108-112，築地書館
- 立花繁信(1984)：翁倉山のイヌワシ，宮崎県文化財保護協会